

Smṛtijñānakīrti をめぐる Khams の 仏教活動について

川 越 英 真

東チベットの Khams¹⁾ 地方は、チベット仏教史の上では 10 世紀後半頃に始まる流伝後期 (bsTan pa phyi dar) の発祥地と伝えられる。その理由は、Dar ma の破仏後もその地方に戒律の伝統が存続していたために、Klu mes を始めとする「dBus・gTsañ の 10 人 (又は 6 人 etc.)」と称される出家者たちが、それを継承して中央に復活したことに拠る。

彼らは Khams, 具体的には mDo smad (Amdo) の Dan tig 山麓の寺で受戒し、律を学んで中央に戻った後、各地で寺院を修復・創建して住持し、僧伽を形成して戒律に基づく仏教復興を展開した。

そして 11 世紀前半には、Khams の ḥDan ma にいた Se btsun のもとに dBus から, ḥBrom, rNog, Khu らが遊学したのに前後して、インド人のパンディタ Smṛtijñānakīrti が mÑaḥ ris から gTsañ~dBus を経て Khams に辿り着き、そこで仏教活動を開始したと推測される。

本稿では、流伝後期初期の Khams での仏教活動の中から、チベット訳経史における Smṛti の位置づけを明らかにするために、ḥBrom ston ら彼をめぐる人々との関連を探りながら見てゆこう。

I. Klu mes ら出家者たちが dBus に戻ったのは、ḥBrom の見解によれば、戊寅の年 (978年) とされる。彼らは破仏の中心地 lHa sa を避けて bSam yas 寺に入り、Yum brtan の子孫である Khri pa から歓迎された。そして Klu mes は bSam yas の近くにある Ka (/Kwa) chu を住持した。Ka chu 寺は 8 世紀前半, Khri lde gtsug btsan の代に建てられた五ヵ寺の 1 つで、同様に Brag dmar 地域にある mGrin bzañ 寺と共に古刹として知られる。

その後 Klu mes は、dGaḥ ldan の北東 La mo に寺を創建し、律を釈説して多くの出家者を育てるが、彼の四大弟子の 1 人に sNa nam rDo rje dbaḥ phyug (976-1060) がいる。元来 sNa nam 氏は、チベット王家の外戚に当たる氏族に許される“Shaṅ”の称号を有する名家である。その家系の出である彼は、18歳 (993年) の時に Klu mes から出家し、37歳 (1012年) の時、lHa sa の北西、ḥPhan po chu 川

の流れる谷間を占める ḥPhan yul に rGyal 寺を創建した。この寺は dBus の Klu mes 系四大律寺の 1 つとして財力が豊富なことでも有名である。

後に Atiśa の高弟になる ḥBrom ston pa (1004~5-1064) が sNa nam から在家の優婆塞戒を受け、rGyal baḥi ḥbyuñ gnas という戒名を付けたのは、ḥBrom が 17歳の頃である。その機縁は、Khams からインドへ向う途中の Se btsun に出会って、帰依した時に生じたと考えられる。そして、インドへ行かないで、ネパールから引き返した Se btsun に再会した時、ḥBrom は従者として同道することを願ったが、断られたために、受戒後の 19歳頃に彼を慕って Khams の ḥDan (/lDan) ma へ行った。

因に、ḥDan ma には Smṛti が『俱舍論』を釈説した所の Kloñ than があり、ここから彼の弟子 gYas chen po Śes rab grags らによって『俱舍論』の釈が中央へ流布した。

さて、ḥBrom は 20年近く Se btsun のもとにいたが、そこでは昼間は Se btsun の身の回りの世話や家畜の飼育をし、夜は警護の見張りをする奴僕の日暮しが長年続いた。しかし ḥBrom は、粉を碾きながらも手元から本を離さず刻苦勉強した。そして、Se btsun からニンマ派の密教と顕教は大乗のアビダルマとして『阿毘達磨集論』、『瑜伽師地論』、『撰大乘論』などの瑜伽行派の論書を、また中観関係は、Śāntideva の『大乘集菩薩学論』、『入菩提行論』などを学んだと言われる²⁾。

Khams のニンマ派の密教は、8 世紀後半の Khri sroñ lde btsan の時、Tsha ba roñ へ追放された Vairocana が伝えた rDsogs chen の伝統が続いており、また顕教の諸論書は、lDan dkar ma 目録によっていずれも流伝前期に翻訳されたことが知られる。

こうして、Se btsun のもとで研鑽を積んだ ḥBrom は、飽き足りないかの如く、
「受け難き人身を得た今世において、私が真正な法を行う場合に、これまで学んだだけで十分であるか、否か。そのことをインドの学者に問う際に、間に通訳を必要としないようにしよう。」(SG, 85b)

と考えた。そこで、近所にいたインド人のパンディタに就いて、サンスクリット語やインド文字を学んだ。そのパンディタを Smṛti と見なしたのは、sNar than 寺第 7 代として 36年間座主を勤めた mChims chen mo (?-1289) であると SG (85b) は指摘する。

II. Smṛti がネパールを経由して西チベットの mÑaḥ ris へ向ったのは 11世紀の初め頃であろうか。当時の mÑaḥ ris は Ye śes ḥod を中心に王室が熱心に仏教

を信奉し、とりわけカシミール地方との交流を通して、寺院の建立や訳経事業等を推進した時期である。そのために、カシミールへは Rin chen bzañ po らが遊学し、カシミールからは Śraddhākaravarman らのパンディタや工芸家らが多数 mÑāḥ ris に招かれている。破仏後に仏教の衰退が続いたチベットで、当時この地方は、最も仏教活動が盛んな所であったと考えられる。

こうした状況のもとで、Smṛti がネパール出身の翻訳官 Padmaruci から mÑāḥ ris の Pu rañs へ招請されたとしても、決しておかしくはない。もう 1 人のパンディタ Phra la riñ ba と共に Smṛti は Pu rañs に着いたが、不運にもその翻訳官が腹痛症に罹って死んでしまったために³⁾、チベット語が分からないまま、そこを去って中央方面へ流浪して行った。そして Smṛti は gTsañ の Śab と rTa nag と Śaṅs で三度も捕えられて売り渡され、牧羊人として悲哀の生活を余儀無くされた。そうした境遇から Smṛti を請け出したのは dPyal Se tsa (/rtsa) bSod nams rgyal mtshan⁴⁾ であろう。

dPyal はネパールで Pham mthiñ pa に師事し、Nāropa 流の *Hevajra* 等、無上瑜伽密教を聴聞して精通した比丘の翻訳官である。従って、彼の訳業には、*Hevajra* の注解や優婆提舍、*Guhyasamāja* の儀軌や *Kṛṣṇayamāri* の難語釈などの無上瑜伽関係が多い。その dPyal が Smṛti を sMan luñ 寺に招いて、多くの法を請問した。sMan luñ は Ḥod sruñs の子 Khri dPal ḥkhor btsan の代に造られた寺とも dPyal 自身が建てた寺とも言われる⁵⁾。

Smṛti は sMan luñ から ḥPhan yul に行き、そこから Khams 出身の商人と連れ立って Khams の ḥBum ri という所に行った。Smṛti はそこで Tshoñ sde Ṃag gi dbaṅ phyug から歓待された。そして、チベット語に熟達して多くの法を説くと共に、Smṛti がインドから携行したと思われるインド語の経函のうち、次の諸本を翻訳して Tshoñ sde に与えた。

即ち、Vīlāsavajra⁶⁾ (sGeg paḥi rdo rje)⁷⁾ の著作である *Nāmasaṃgiti* (NS) の『広釈』(東北 No. 2533. 以下、東北目録の番号のみを示す)、『*Guhyāpanna* 成就法』(No. 2579)、『内心修習』(No. 2580)、『護摩儀軌』(No. 2581)、『曼荼羅儀軌』(No. 2582) のいわゆる彼の「五法」と称するもの、Smṛti の友人で、同様に Devesvara 門下の Śāntigarbha が著した『善住儀軌』(No. 2583)、そして Smṛti 自作の『尺度儀軌』(No. 2585)、『開眼儀軌』(No. 2586)、*Guhyāpanna* の『注釈』(No. 2584) の 3 冊、その他に文殊の『成就法』(No. 2587; 2588) がある。

このうち『広釈』は、NS を瑜伽タントラとして密意を解釈した大・中・小の

注釈書がある中の「中注」に相当する。この「中注」を始めとする Vilāsavajra の五法に基づく「具秘密」(gSañ ldan/Guhyāpanna) 部類は、Vilāsavajra 流として流伝した。Smṛti は師の Deveśvara から、この流儀を継承して Khams の Tshon sde に伝えたが、Smṛti の後にも、先の Śāntigarbha の弟子で、翻訳官 Shañ Cog gru mchog から Pu rañs に招かれた Sūryasiddhi が、同流を sKyi Bye ma luñ ba に伝えた。

sKyi は lHa sa の北西 sTod luñ の Bye ma luñ に住んでいた時、Smṛti の訳した NS 関係の諸本を入手して NS を信奉するようになった。その後、彼が当時のチベットで瑜伽密教の本場とも言える mÑaḥ ris の Pu rañs へ Yoga を学びに行った時、Sūryasiddhi と出会って聴聞したことが「具秘密」を承ける契機になった。

このように、Smṛti によって端緒が開かれた Vilāsavajra 流の導入は、別に Sūryasiddhi によっても行われ、それぞれ「低地系」と「高地系」と称する。流伝後期の瑜伽部密教は、本来 mÑaḥ ris を中心に流布したが、この NS の場合は逆に Khams から流布した点に特徴がある。

Smṛti は、この他にも Khams で多くの著作や訳業を残した。中でも、無上瑜伽密教に関するものが顕著である。

まず母タントラ *Catuḥpīṭha* (CP) 部類には、その釈タントラ (No. 430)、最終章 “gSañ baḥi gdan” (秘密座) は Smṛti の自作である CP の『注釈』(No. 1608)、『成就法』(No. 1612)、CP に関する Smṛti の著作 (No. 1621) 等の翻訳がある。父タントラ *Guhyasamāja* (GS) 部類には、その釈タントラ『四天女所問』(No. 446) とその『注釈』(No. 1915; 1916)、GS の第18分 Uttaratāntra 関係に、その『注釈』(No. 1787) と Jñānapāda 作『四支成就法』(No. 1856) と Smṛti 自作『六支瑜伽釈』(No. 1900) の翻訳がある。その他にも、『菩提心釈』(No. 1800; 1801) に対する『注釈』(No. 1829) と GS の『注釈』(No. 1914) があり、両方とも Smṛti の作である。

Smṛti の GS は、二大流派の「聖者流」と「Jñānapāda 流」の両方に属する著・訳書があり、別に Smṛti 流として区別されるものもあるが、Smṛti の流儀は基本的には Jñānapāda 流に含まれる⁸⁾。それ故に、Smṛti が Khams で行った GS の釈説は Jñānapāda 流の Khams 派と称される⁹⁾。

以上に見てきた如く、Smṛti は Khams で著作、翻訳、釈説等の多彩な仕事をした。また文典家としての側面も見落せないが、今は触れない。こうした Smṛti の活動を踏まえて ḥGos の見解を参照すれば、

密教の新訳の最初は Smṛti 尊者に始まった、と言われることがあるけれど、彼は dBus・gTsañ では翻訳をなさっていない。後に Khams で *Nāmasaṃgiti* の Vilāsavajra 部類, *Śrīcatuḥpīṭha* や *Guhyasamāja* 部類等, 多くのものを翻訳したけれど、彼より大翻訳官 Rin chen bzañ po の方が、密教の翻訳をなさったのは先であると思われる。というのは、ḥBrom ston pa が Se btsun 尊者の奴僕をしていた時に、Smṛti に翻訳の仕方を学んだ、と (別なものに) 出ているし、それから程なくして、ḥBrom が mÑah ris に行かれた時、大翻訳官は85歳になられていたからである¹⁰⁾。(DÑ, vol. ña, 1)

と述べるのが概ね妥当とも言える。つまり、チベット訳経史上における Smṛti は、Rin chen bzañ po より後の11世紀前半に位置づけられるべきであろう。

本稿の資料として用いた主要文献: Bu ston, *Chos ḥbyuñ chen mo* (BC), *Gru gziñs* (GZ); ḥGos gShon nu dpal, *Deb ther sñon po* (DÑ); Kun dgaḥ rgyal mtshan, *gSal baḥi sgron me* (SG); dPal bo gTsug lag, *mKhas paḥi dgaḥ ston* (KG).

- 1) Khams はチベット全体を地理的に、高地の mÑah ris, 低地の mDo khams, 中間地の dBus・gTsañ とに三区分した際の mDo khams を意味する場合、低地を北東チベットの Amdo と南東チベットの Khams とに二分した際の Khams を意味する場合があるが、本稿では前者を指す。
- 2) Cf. mChims Nam mkhaḥ grags, *A ti saḥi rnam thar*, 54a, 80a; 羽田野伯猷「カムの仏教とそのカーダム派並びに衛蔵の仏教に与へた影響について」(『文化』20-4, 1956) pp. 14-18.
- 3) BC. 138a によれば、翻訳官はネパールで死んだと言うが、GZ, 88b; KG. vol. ta, p. 157 を採る。
- 4) DÑ. ja, 19a や *Padma dkar poḥi Chos ḥbyuñ*, 205a によれば、dPyal Se tsa の伯父に当たる dPyal ḥByuñ gnas rgyal mtshan と示すが、BC, GZ, KG 等に言う如く、sMan luñ 寺に招いたとするならば、Se tsa であろう (cf. 北京 No. 2943, 96b-97a).
- 5) Cf. bSod nams rtse mo, *Chos la ḥjug paḥi sgo*, 313b; BC, 142a.
- 6) 従来 *Lilāvajra* とされていたが、R. Davidson, “The Litany of Names of Mañjuśrī” (*Tantric and Taoist Studies*, vol. 1, 1981) pp. 6-7 に従う。
- 7) この名前は密号 (gSañ mtshan) である。本名は dPal ldan Byaḥ chub mchog gi skal ba dañ ldan pa と称し、略して Byaḥ chub mchog (Varabodhi/Agrabodhi) と言う (cf. GZ, 67a-b).
- 8) 羽田野伯猷「秘密集タントラにおけるデニャーナパーダ流について」(『文化』復2-1, 1950) pp. 13-14.
- 9) *bKaḥ ḥgyur dkar chag*, (東北 No. 4568), 92a.
- 10) 訳文中 (*~*) のテキストは “de bas Lo chen Rin chen bzañ pos gsañ sñags kyi ḥgyur mdsad pa sñā bar snañ ste/ḥBrom ston pa Jo bo Se btsun gyi g-yog byed paḥi dus Smṛi ti la lo tsā bslabs so shes ḥbyuñ la/de dañ ñe bar ḥBrom gyis mÑah ris su byon paḥi tshe/Lo chen gyis lo brgyad bcu rtsa lña bshes paḥi phyir ro!” とあるが、この箇所は Roerich 訳 (*The Blue Annals*, pp. 204-205) は訳経史の上からも看過できない誤訳である。その原因は「比較」を表わす “de bas” を正しく解釈しなかったことと接続辞 “ste” 以下、文末の “phyir ro” までは「理由」を表わす構文として把握されなかったことにある。従って、この誤訳に基づいた A. Wayman (*The Tibet Journal*, vol. 8-3, 1983) p. 25 や稲葉正就氏 (仏教学セミナー, vol. 4, 1966) p. 21 の記述は訂正されねばならない。

(東北福祉大学講師)